
君と往く戦記

がらんどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と往く戦記

【Nコード】

N2918X

【作者名】

がらんどろ

【あらすじ】

神災と呼ばれる現象で、空高くに逃がされた僅かな土地。人智の及ばぬ脅威にさらされながらも、そこでは人が生き、歴史を記していた。

神の光を授かりし大陸と呼ばれるレーネルダンの大地を舞台に記される歴史。

その中心には常に歴史に名を残した、ある女性の姿があった。

1 - 1 (前書き)

異世界トリップではなく、純粋なファンタジー・戦記です。
現代日本人の異世界活躍譚をお読みになられたい方はご注意下さい。

世界は、あまりにも唐突に変化を受け入れてしまった。

あの日のことは今でも夢に見る。

私だけではない。友も、すれ違う顔見知りも、名も知らぬ誰かも、みなが等しく忘れられぬ悪夢に苛まれ続けている。

世界を覆ったあの光。

望みもしないのに与えられた力。

空高くに浮かぶ僅かな土地。

それでもなお、人々はこの大陸に付けられた神へ継る名を捨てられない。

希望と皮肉を現実からの逃避でないまぜにしたまま漂う土地。

神の光を授かりし

レーネルダン”大陸”、と……

レーネルダン大陸のほぼ中央には、地の果てまで広がる平原が広がっている。

初夏の香りをはらんだ風が駆け抜け大地と山々の緑を揺らす。北の山からおりてきた風は畑の稲穂と踊り、そして海へと駆け抜けていく。

海に面した小高い山から伸びる川に沿うようにして、壁一面が白く輝く城がそびえ立っていた。

エスト王国の首都であり国王の住まう城ラトリアだ。

山の中腹付近で突き出している中央塔を中心に、半円を描くように城壁が2重に張り巡らされている。一番内側の一ノ郭の中には城がそびえ立ち、二ノ郭との間には貴族が、その外には一般市民たちが住む城下街が広がっている。

郭には関所が設けられており、山の上から下に降りるのに許可は

必要ないが外から内に向かうにはそれなりの許可証が必要となる。

早朝と深夜については許可証を持っても通行を許されないのが常で、昼には全てが繋がり動き出すこの大都市も、朝の早い時刻では郭毎に動きが異なっている。

朝日が登ってからまだ間もない早朝。朝の早い農家の家庭でも、ようやく起きだすかという時刻に、最外殻である城下町を出発しようとしている馬車があった。

馬車には華美な装飾が施されていて、それを引く馬も艶のある黒毛を風になびかせている。堂に入った名馬ぶりは、人々が起きだして確認すれば騒がれてしまうことは間違いない。馬の見事さと馬車に付けられた刻印から、それがラトリア王城の馬車であることは一目瞭然だったからだ。

だがその時間ではさすがに人々は起きだしておらず、街の中で動いているのは朝食の用意を始めているパン屋ぐらいだ。通りにある人影は馬車に乗り込もうとしている少女と、中で彼女を迎え入れようとしている妙齡の女性。そして開いた扉を支える御者だけだった。「宜しくお願い致します」

馬車の中で背筋をまっすぐに伸ばしている女性に、少女が深々と頭を下げる。

卸したばかりの真白い女官服に身を包んだその体は、奉公に出されるには十分に成長しているが女としての主張はやや足りない。

けれども彼女を幼い子供扱いする者はいなかった。

まとも上げてなお腰元まで垂れる長い銀の髪。化粧を施していないくとも男たちに息を飲ませる整った顔。そしてどこか柔らかさを感じさせる佇まいが、立っているだけでも見て取れる。

あまりにも整いすぎた彼女の空気は侍女とは思えないほどで、彼女こそが奉公を受ける貴族ではないのかと思わせるほどだ。

書類では見知っていたものの初めて見る彼女の様子に一瞬息を飲んで、それでも由緒あるラトリアの女官長は柔和な微笑を浮かべて正面の席に座るよう手で促した。

「こちらこそ宜しくお願いしますよ、フィオ＝ランペントライト。私はラトリア城の女官長を務めるミリアム＝グリーンヒルです。さあお乗りなさい。城に着くまでに話しておくべきことは山ほどありますからね」

フィオと呼ばれた少女は一礼してから馬車に乗り込む。御者は扉を閉めると、御者台に腰を収め、手綱を軽く引いてゆっくりと馬を歩かせ始める。

城下町の家々の間を通る土の道では揺れが酷かったが、城へと続く石畳の大通りに出ると、馬車の中はやや静かになった。

車輪が石畳を踏みしめる音が腰から伝わる中、ミリアムはじつくりとフィオの様子を観察していた。

ランペントライト家は商家だという報告を受けている。隣国との間で貿易をしていた家だと聞いているが、昨今の情勢もあってエスト王国内に店舗を持ち、根を下ろして商売を始めているらしい。

商家から送り込まれる侍女の目的は明確だ。貴族とのコネを作り、有力貴族の息子の種でも貰ってくれば、その家とは良い付き合いが出来る。ランペントライト商店は貴族相手にそれが出来るだけの資本と名声を持っていると報告書では上がっていた。

目の前のフィオからは、少女といった幼さを残しながらも”あどけなさ”はあまり感じられない。

かといって宮廷内の女性が繰り広げている女らしい”陰惨さ”を備えているようにも見えない。

箱入り娘といった風情ではないが、十分に豊かな生活をしてきた彼女が飢えた獣のように貪欲な女達の中に放り込まれるかと思うと多少心配になる。

通常の新人であれば新人らしく若手の中で針仕事をさせたり力仕事をさせるので、そのような心配は必要ない。徐々に侍女の世界の知識を得て、十分な経験を積んだ段階で貴族たちに直接お仕えするようになるのが常だ。

だが、手元に握りこんでいる羊皮紙に書かれている彼女の着任先

は現在の宮廷において最も暗く、最も厳しい世界だった。

（今更心配しても始まらないでしょうね……）

ミリアムは表に出さぬように心のなかで盛大に肩を落としながら、手元の羊皮紙を広げて読み上げる。

「フィオ」ランペントライト。あなたは本日より、栄えあるエスト王国の中心たるラトリアを支える侍女の一人となります。暗闇の中でか細い火を灯し、針を持てますか」

「は、はいっ！」

ミリアムが読み上げ始めたのは、侍女として働き始める女に贈られる決まり文句だ。

ただ相手の言葉に返事を返すだけなのだが、フィオの声は裏返し、たった一言の返事ですら噛んでしまうほどに緊張している。

だが、それすらも侍女長にとってはいつものことだ。

今まで何人もの新人を落ち着けてきた柔和な笑みを顔に貼り付けると、ミリアムは再び読み上げ始める。

「高貴なる人々の影に侍り、彼らの生を支えられますか」

女官長の優しい瞳に見つめられて、フィオの肩から力が抜ける。

小さく長く息を吸った彼女はしっかりと女官長の瞳を見つめ返して顎を引く。

「はい」

それから幾つかの問答を全て肯定して、女官長は羊皮紙を丁寧に畳み、フィオに手渡した。

「その羊皮紙にも書かれています、貴女は私の直接の部下となり、あるお方のお世話をして頂きます」

「ミリアム様の下で直接、ですか？ お針子から始めるのでは……」不安そうに聞くフィオに、ミリアムはゆっくりと首を横に振った。たとえそれが女官でなくても、新入りは若いものが面倒をみるのが常識だ。組織とは、それを繰り返すことで繋がっていく。それがいきなり組織のトップの部下として働くとなれば、どのような気丈夫であつても目眩の一つも起こして当たり前だと言えよう。これが

男なら新米の見習い騎士がいきなり国王の近衛師団長を任されるようなものだ。

ミリアムとてそれは重々承知しているが、年若き王子がいればこれもまた若い女が側女として着くことも必要不可欠な常識だった。であればこそ、羊皮紙に綴られた上辺の言葉の下に何が隠れているかをおおよそ感じ取ったフィオが動揺するのも彼女の予想通りであつた。

言葉も出ないまま青ざめるフィオの顔は、その髪で光を反射していることも相まって陶磁器のように白い。

ミリアムは注意深く彼女の様子を見守る。

定まらない視点と、それでもミリアムからみられていると分かる緊張に、フィオが目線を外に向けたその時、王宮馬車は二の郭の間所を抜けた。

軽い上り坂に入って背中が彼女の人生で最も柔らかい布に押し付けられる中、手狭に繋がっていた家屋の壁が途切れて下界が視界に飛び込んでくる。

「わぁ……きれい……」

フィオの目に映ったのは美しい海とそこへ繋がる巨大な河川。その川辺に連綿と続く城下町。その全てが顔を出し、高くのぼり始めた朝日に照らされていた。

「……ミリアム様。私、こんな綺麗な場所に住んでいたんですね」

二ノ郭の外に暮らす国民は、ラトリア城を見上げて美しく思うことはあっても自分たちの住む街を上から見下ろす事はない。

城に登城して初めて知る自分の街の美しさ。この街がこんなにも美しいのは自然の偉大さだけではない。

侵略してくる敵国や、災害から人々を守る国が有ってこそ、この街は存在している。

宮廷の暗い部分を知り尽くしているミリアムでも、この景色を見ては心を洗われている。

だからこそ、若干詐欺めいた刷り込みではあるが本心から新人に

言葉を贈るのだ。

「そうですよ。そしてこの城と、この国の美しさを損なわぬ為に、我らが国王とその一族は在るのです」

ミリアムの声に引き戻されたフィオの視線がしっかりと自分の視線に向きあうのを確認して、彼女は鷹揚に頷いて続けた。

「私たちは女です。私たちは剣を持ちません。諸外国と交わす羊皮紙にその名を刻みもしません。神託を授ける神父でもありません。それでも私たちは、この国を支える方の礎と成れるのです」

神妙な口調のミリアムに釣られて、フィオも頷く。

この子は大丈夫そうだ。そう判断するとミリアムは城までの景色を楽しみなさいとだけ伝ええると、御者台の間の窓を開けて御者と相談を始めた。

感動半分ほうけが半分といった表情で外を眺めるフィオは、けれども頭がしっかりしている女性の様だと侍女長は判断した。

自分も他人を管理する職に付くまではまったく何も考えずに生きてきた田舎者だったが、この娘はどうやら違う様だ。

それゆえに、妾として、しかもあの王子の元で彼女が保つかどうか心配になった。なまじ何も考えないで環境を受け入れるだけの女であれば……。

そこまで考えてミリアムは頭を降った。フィオや彼女が特別なのだ。だからこそ、ふとした思考の隙間にとある人物の顔が浮かぶ。

城に戻って日が中天まで登れば、起き出してきた貴婦人達と利権を貪りあう貴族様がたのお相手をしなければならない。

せめて、フィオがそのような環境の中で心折れずにいてくれると思う。そして、できるなら仕事を教えるのに手間がかかりませんように、とミリアムは思ったのだった。

やがて馬車は長い坂道と最後の関所も抜け、脇道にそれる。王城へ繋がる石畳を馬車で傷つけないために、脇道にそれてすぐのそこ

ろにある厩舎に辿り着く。

ゆつくりと止まった馬車から先に地面に足をつけたのはミリアムだった。

「さあ、着きましたよフィオ」

ミリアムが促すとフィオは頷きを一つ返して馬車を降りた。

そして、今までの中で最大級の驚きを顔中に広げることになる。

この城を始めて訪れて見せる、お決まりの反応の最後の一つ。

ラトリアの美しい街並みは上から見下ろして華美が極まるのはもちろんのこと、主たる王城は朝日を受けて荘厳たる威厳を放っている。

だが、ミリアムはフィオの表情に見慣れぬ色を見つけた。

畏怖と感動以外の色。そしてその残り一つを知るために彼女の目の先の先を追う。

原因はすぐに理解できた。心のどこかで「やはりそうか」と思いつつも顔には出さず、恭しく頭を下げる。

「ミリイ、その子が新しい娘か？」

自分よりもはるか年上の侍女長をして若い娘の呼び名のようにミリイと呼ぶ。

「ええ、そうですよアイラ様」

猛るように赤いルビーの髪をなびかせるその女性。

この人こそが、彼女らの仕えるその頂点の一人。

「フィオ、この方が第一王女のアイラ」ミラ「フォン」ノワール様です」

エスト王国の第二継承権を持つ、第一王女アイラ「ミラ」フォン
「ノワール」。

侍女であるフィオからすれば例えようもなく高貴な相手であり、
畏怖を感じるのも当然だ。

だがしかし、アイラに対面した人々が彼女に感じる畏れのほとん
どは彼女の血筋によるものではない。

封建制のエスト王国において、王女という存在は継承権という存
在からかけ離れている。

言わずもがな、彼女たちの生涯の意味は『誰に娶られるか』とい
う一点のみにある。既に逝去しているが現国王ギルバルトの妻だっ
たアーシェ王妃は隣国の王女であった。他にも例を上げていけば枚
挙に暇がない。

見事な治世を敷いているギルバルト王の娘であるアイラがどこに
嫁ぐのか、生まれたその時から貴族たちの間で何度も口の端に上っ
たのも当然だったのだが、現在のエスト王国……少なくともラトリ
ア城下においてその話題を口にするものはいない。

燃えるような赤い長髪、並の男性よりも頭ひとつ抜ける長身。そ
して”武術で鍛えた”引き締まった身体は、力強さを感じさせても
女性としてのバランスを失っていない。

人物判断で名を知られる賢人が宮廷にて謁見した際に、

「端的に述べて質実剛健、書に記すのであれば勇猛果敢な将の才覚
実際に対面して言葉で表せる例え無し」

と彼女を評したことがある。

本来ならか弱くたおやかさを強調されてしかるべき一国の王女に
対しこの様な批評をすればどうなるか。本人ですら首を飛ばされる
事を覚悟で述べたというが、実際は国王と王女が揃って彼の喻えを
気に入るという珍事は、民の間にまで話が広がった。

決して見た目だけの話ではなく、実際に剣の実力を証明した噂話（と言っても実話の方が噂よりも悲惨な結果を迎えた方が多いのだが）もつぶさに存在するのだが、それこそこちらも枚挙に暇がないともあれ、女だてらに武術に精を出し、積極的に政治学を学ぶ賢く強かな彼女は、その兄と比較に出された上で「次の王座が相応しいのは誰か」といった議題が酒場で上がってしまうほどに有名なのだ。

そして、そんな彼女がいきなり目の前に現れてしまえばただの少女がその威圧感に慄くのも当然だといえる。

心の準備をした隣国の武人ですら彼女の挑発には剣を”抜けない”のだ。

さて、どうやってフィオに救いの手を差し伸べようか、とミリアムが考えたしたが、その心配もとりあえずは必要なく、フィオは勢いよく頭を下げた。

「あ、あのっ！本日よりミリアム様の元で働かせていただきます、フィオ＝ランペンライトです！」

許しが出るまでは、顔を下げ続ける。最低限の礼節ではあるが、彼女の前でそれがしっかりと実践出来るらしいと知って、多少なりとも感心した。

なにせしっかりとした男でさえも、中途半端に下げた顔を反らせてアイラをみようとするのが常だ。それほどまでにアイラの放つ魅力の吸引力は強い。

フィオの態度に満足しつつも、ミリアムはため息をついた。振り返らなくてもアイラが不機嫌な顔をしているのがわかる。

恐らく、この方は偶然ここに来たのではあるまい、と確信しているからだ。

城内の事情、そして早朝から執務室を空けている侍女長、次に召し抱えられる侍女の噂、その全てを耳に入れて彼女の脳内で合わさ

った瞬間、フィオが何の為に王城に連れられてきたのかを看破したはずだ。

とはいえ、幼い頃からアイラの成長を見守ってきたミリアムも勤めは勤めとして果たさねばならない。

「アイラ様……」

「ミリイ。先に言うておくが虚偽は認めんぞ。彼女は兄上の側女にするのか？」

本人を前に無造作に言う事ですか！と声を上げそうになってそうではないと口をつぐむ。

アイラの声と表情に怒りは見えない。それ故に発せられる冷酷さが、研がれた刃の様に周囲を無造作に突き刺している事に、彼女は気づいているだろうか。

ここ数年の彼女の成長ぶりは目を見張るものがある。その動機になったのは間違いなく大陸を襲った神災だと周囲は考えているが、アイラがその心の中を明らかにしたことは一度もなかった。

そしてただ一人で研ぎ澄ませた抜き身の刃は、眼光だけで新米の侍女一人を怯ませるに足るほどになっていた。

さすがに顔を白くしている本人に答えられる事でもない判断して、ミリアムは半歩横にずれてミリアムを自分の影に隠し、毅然とした表情でアイラを見上げた。

「左様でございます。側女を勤めていたシェラは病をこじらせて家へ戻っていますので、代わりが必要なのです。しかし、今は他の者を回せるだけの余裕ありませんので……」

通り一遍等な回答でアイラを納得させられるわけがない。それを承知していながら、ミリアムもこの程度の返答しか返せない。

言い切ったままやるせなさをこめたミリアムとしばらく睨み合ったアイラはため息をついて表情を和らげた。

幼い頃から自分を叱り続けてきたミリアムがこの程度の事しか言えない。

彼女の回答自体はさておき、それは事実なのだと分かれば十分だ

ったからだ。

「フィオ、面を上げて」

先ほどの威圧感はどこへ消えたのか、一転して女性らしい優しい声でアイラが声をかける。

けれど、フィオの身体はいつこうに起きようとしなかった。礼儀に頑なすぎるのかとミリアムとアイラは同時に心のなかで思案したが、緊張から身体が言うことを聞かないのだと思い当たるとあるうことかアイラは自ら地に膝をつけ、下から彼女の肩を押し上げる。

「緊張するなというのは難しいだろうが、そこまで固くならなくてもいいぞ」

肩に手を当てたままアイラはすつくと立ち上がり、フィオは今度こそ正面からアイラの瞳を受け止めることになった。

王女はその風貌もそうだが、何より尋常ではない威圧感を持っている。気圧されて口も開けないでいる少女を手助けしようとミリアムが口を開きかけたその時、アイラがとんでもないことを提案した。「ミリイ。この子は私が貰う」

空いた口がふさがらないとはこの事だ。開きかけた口がそのままの形で動かなくなる。

それでも一瞬で咳払いをして王女を睨みつけたのは長年の付き合いがある教育係兼侍女長の経験の賜物たまものだろう。

「ではライアス様の側女についてはいかがなさるおつもりです」

「世話係には普通の世話だけさせればいい。」夜の世話”が必要なら、兄上は下に降りて自分で何とかする。お付きの奴らが金を出すのを見ないふりすればいいだけだ」

ミリアムがそのアイデアを聞いて思い切り顔をしかめる。

アイラはアイラで、そんなミリアムを見て楽しそうに顔をほころばせる。

「ははっそんなに難しく考えるなミリイ。私に側仕えがないことに苦情を言っていたじゃないか」

「それは単純に貴女が婦女らしからぬことを好まれるおかげで、普

通の侍女達がついていけなかったからです」

無論、嗜みとして踊りも音楽も女として人並み以上にこなせるだけの實力はあるのだが、それ以上に彼女が打ち込むもので実績を上げていくだけに人々の印象はそちらに偏り気味だ。

目の前の会話でよくよく見れば今の彼女が専用に誂えたドレスでは無く、乗馬用のシャツとズボンという服装だった。

ミリアムが油断した一瞬でアイラは素早く動き、フィオを抱えて厩舎の中へ駆け込む。

「ふ、フィオ！？大丈夫ですか！？」

アイラの事を齒牙にもかけず侍女の心配をするとは侍女長として失格ではあったが、アイラ相手の対応としてはこの上無く正解だ。アイラはフィオを自分の前に置いて腰を麻紐で結び、馬に乗って飛び出してきたからだ。

もはや（今回も）説得は不可能と悟ったミリアムはこれだけは伝えなければとアイラを呼び止める。

フィオを左手で支えながら、右手のみで手綱を捌いたアイラが急停止して振り返る。

「……夜にはフィーデル卿との会食です、お忘れなきよう」

合間に「遊びに夢中になって」と内心で付け加えながらミリアムは頭を下げる。

ああと微妙な期限の声を出しながら一瞬目を閉じたアイラは、結局約束の相手を思い出せなかったらしく素直にミリアムに問い返した。

「それはどっちの卿なのだ？」

「ゴルフ様の方です」

「……それはまた気が重い。今の内に軽くしておかなければ」

そう言うときアイラはムチを使わずに足で軽く蹴って馬を走らせる。フィオを抱えたその姿は瞬く間に視界の外へと消えて行き、ミリアムとしてはもう二、三伝えておきたい事があったのだが呼び止める暇もなかった。

王女が気を晴らしに行つたのとは逆に気が重くなつた侍女長は、もう一枚用意してあつた羊皮紙を取り出してため息をついた。

「まったく、国王も意地が悪い」

そこには先ほど読み上げたフィオの名を書いたものと同じ内容が書かれていた。唯一違ふのは専属者氏名。アイラの名が書かれたそれを懷にしまつてミリアムはもう一つため息をついた。

仕える主人の命で、王子の名のついた羊皮紙を隠れて削らなければならぬ。王女が王女なら王も王なのだった。

ミリアムが執務室に戻って侍女達へ指示を出していたその頃、ラトリア城の一の郭では全速力で飛び出した馬の背で赤と白の人影が揺れていた。

お気に入りの愛馬にフィオを乗せたアイラは、ちらほらと人が現れ始めた大通りを一度も減速せずに駆け抜け、あまつさえ衛兵が詰めていた関所も一息に突破した。

最後など衛兵が「今日こそ我らが誇りを見せろ！」などと叫んでいたが、フィオは聞こえなかった事にした。まして彼らの兜に（ラトリア城に詰めている国軍の主力の）近衛師団章など決して見えなかった。

猛スピードで駆ける馬上で風が耳を打つ。アイラの前に座らされ、手綱を握る腕の内で抱えられるように支えられている。余計なお世話だというのにお互いの腰を紐で結ぶおまけつきだ。

身をよじる事すらできないというのはむしろ危険なのではと知らないでもないフィオだったが、アイラの剛健ぶりがあまりに噂通りだったためにむしろ安堵すら感じ始めていた。

封建国家における王族の女性は、剣の代わりになる道具でしかない。

侍女誓約の際に侍女長が言っていた事が事実だ。

女は国の剣にはなれない。

代わりとして盾になるのか毒になるのかは女次第だが、アイラはそのどれにもなりそうにない事で有名だった。

曰く、ラトリアの赤獅子。

曰く、金羽の胡蝶。

他にも色々な勇名で知られる彼女に背を預けて不安であれば、他に背を預けられる者などそうはいないだろう。

これほど身に余る栄誉もまたとないと開き直り、どこに連れて行

かれるのかは分からぬままフィオは王女に身を任せて流れる景色と
追いつく風を堪能することにした。

どれほど走っただろう。

アイラが馬を止めたのはラトリアから流れ出ている川の支流が
ながっている湖だった。

昼過ぎになれば釣り人で賑わう湖岸も、朝食を取っているような
時間では人っ子一人居はしなかった。

湖岸から反射してくる光に目をすばめながら、ようやく紐を解い
てくれるのかと息を吐き出す。他人の操る馬に長く乗るのは酔いや
すく疲れやすい。

腰に巻かれた紐や、背を一国の王女にくっつけている緊張から開
放されたいフィオだったが、アイラは微動だにしない。

そのままの姿勢で馬を降りることもなく、もちろん紐を解くこと
もなかった。

「アイラ様……その、」

「随分と可愛い声だな、”フィー”」

どすの効いたアイラの声に体が少しだけ跳ねる、のをフィオは精
神力で抑えつけた。

王女の声には並大抵の男でも出せない鋭さがこもっていた。

分かるものには分かる類の”殺意”がこめられた一言は、若い少
女一人を震えさせるには十分だろうとフィオは判断した。

フィオの動揺と反応の差は、外から見れば分からないほど小さか
ったが、体を繋いだアイラには隠しきれるものではなかった。

「何のことでしょうか、アイラ様。私の名前はフィオで御座います。
その……子供につけるような愛称で親しく呼んでいただけるのは嬉
しいのですが、私如きには恐れ多く……」

”震える声”で見上げるようにして問い返すフィオに、アイラは

余計な判断を加えるまでもなく「下らない芝居はよせ」と切り捨てた。

「お前が何の目的で戻ってきたのかは知らん」

フィオの言葉を途中で遮って、アイラの声は更に険しさを増す。

「男」のお前がそこまで見事に変装しているくらいなんだ、よっぽどの事情があるんだろうよ。だが王女の私がそれを敢えて無視するとしても、私の前で幼馴染が別人のように振る舞って知らんぷりというのは許せん」

自分の判断に一切の予断を挟まない態度。

そして何よりもフィオを抑えつけるように抱きしめているアイラの右手が、すぐにも腰の左に下げた剣の柄へと触れられる位置にあった。

正体がばれそうになった時のため身につけさせられた何通りもの言い訳と話術。そして今までの経験から振り絞った全ての選択肢に逡巡するが、この状況を脱するには能^{あた}わない。そう判断したフィオは肩をすくめて溜息をついた。

「いったい、いつからバレていたのですか？」

何にとは言わず、女性かと間違えるほど美しい声が打って変わって親しそうな響きで少年の口から出る。

それに満足したのかアイラは満足そうに一つ頷くと、フィオの体に回していた手をほどいた。

顔なじみという事は別にしても、女装した男が王城の中に入り込む。

彼らのことを何と呼び、何をするものなのか分かっているかなど、はわざわざ問うまでもない。

それでもアイラの態度はまったく堅くならなかった。

「最初からに決まってる。えらく髪が伸びているのと女装が似合っていたのに驚きはしたが、友を見間違えるわけがないだろう」

侍女長のミリアムですら騙せた変装で、しかも六年ぶりの再開だ

というのに全く通用しないとは。呆れて声も出ないとはこの事かと思ひ知る。

昔からアイラは賢く常人離れた子供だったし、数々の逸話から今も変わらない事は知っていた。

そしてそれすらも騙しきれると思っていたのだが、どうやら自分の見積もりは大分甘かったらしい。

反省しなければなるまいとフィオは内心で心に刻みながら、幼い頃の記憶を自然と思ひ出していった。

フィオの故郷は、王族が避暑地として訪れる山の麓の村だった。アイラとフィオと、そして何人かの友人たち。

警護の兵もついてきていたとはいえ、子供同士は放つて置くという国王の方針から、幼い彼らは半ば放置された状態で遊び回っていた。

代々王族の護衛を排出してきた家に生まれたフィオは同年代という理由から彼らが危険な目に合わぬよう目付としてそれに付いていた。

とはいえ、一人身分の違ったフィオはもちろん一歩引いた立ち位置を守っていたし、声をかけることもなかった。

その輪の中に対等に入っていた……というより入らざるを得なかったのはアイラが引き込んだからだだった。

あの頃は本当に楽しかった。アイラもフィオも言葉に出さずとも同じ思ひを抱いていた。

けれど、それはお互いが幼かったからだだとフィオは結論付ける。あれから六年。

身分どころか存在そのものを偽って王城に入ろうとする者を放つてはおく理由はない。

むしろ近しい関係の人物を間者として”仕込む”事はよくある。

現にこうやってお互いの体を紐で縛っているのが自分を問者とみなしている証拠だろう。

相手の姿も見えなければ体を相手から離せない体勢を固定されていれば、どんな達人でも攻撃や反撃はおろか防御すらもままならない。

女性にしては大柄なアイラに対して、男性の中でも（女性になりきれるほどに）小柄なフィオは、アイラの首から下にスッポリと収まってしまっているのもその一員だ。

顔は動かさないように目線だけで彼女の左腰に下げられた剣を見るやる。

一切の装飾排除された鞘と、柄に巻かれた布の綻びを見る限り、どう考えても式典向けではなく実戦用の武器だと思われた。

その上で一国の王女かつ国内最強の一角とまで言われる武芸者が身に付けているという事実を加味すれば、おそらく人の首と胴体を切り離すには十分な業物であることは間違いない。

体勢の不利に加えて体格差と武器の有無ときは、どうしようもない。

せめて自分が得意としている武器さえあれば、抗うこともできるだろうが、武器は城内に侵入できてから支給される予定だったため手元がない。

一通り抵抗の可能性を考えて放棄してから、冷静になれと深呼吸をする。

そもそも、自分の目的はアイラを害することではない。

領主から直接に賜った指示を果たせないのは無念だが、余計な人物を殺す事は厭われる。それも幼馴染を手にかけるくらいなら任務を放棄して脱領者となり、野垂れ死んだ方がマシというものではないだろうか。

本当にそれで後悔しないか。

自分に問いかけて返って来た答えは考えるまでも無いという本心だった。

となれば、まずはアイラを油断させて縄を解いてもらわないといけない。

アイラが縄をほどいた時点で、馬を飛び降りて脱出しよう。馬に追われても湖の畔にある森の中へ駆けこんでしまえばなんとかなるはずだ。

そう考えてフィオは全身から力を抜いてアイラにもたれ掛かった。男としては非常に情けない事この上ないとフィオも思うが、女装を幼馴染の異性に見られている時点で情けなどかけてもらいたくない。

不安で胸が苦しくなる程に無防備な姿を晒す。

一流の実力を持った相手だからこそ、フィオが無防備であることを悟ってくれるはずだ。

だが、フィオのそんな思いは再び打ち碎かれる。

十年ぶりに再開した幼馴染は、油断をすることなく一際鋭い言葉の刃を振り下ろしてきた。

「で、殺しに来たのは私か。それとも兄か？」

視線を合わせられずに、顔を伏せてしまった。

まずい、という焦燥が外に出るよりも早く、アイラが言葉を紡いでいく。

「ラオの連中がいまさらお前を私の目の前に送る以上、狙いは十中八九私だと思うが……それにしても無遠慮すぎだ」

「……………」

「分かっていると思うが、沈黙はある意味での肯定にはなっても返答にはならないぞ。アイラである以上お前は私の友だ。だが」

王女は刺客を、赦しはしない。

突然口をつぐんだアイラが何を言い淀んだのか。

会話を続けてそれを引きずりだそうかとも思案したが、フィオはその前に背中の熱さに気付いた。

姿勢にも口調にも変化の見えないアイラだったが、先程よりも熱く、そして強くなっている彼女の体に気づいてフィオは自分でも気づかぬ内に唇を強く噛み締めていた。

アイラは何とも思わずにこうしているわけではない。

この熱は、自分の中にあるものをひたすら意志で抑え込んでいる彼女の溜めだ。

あれ程までに苛烈で勇壮な王女が抱くこの熱の正体は何なのだろう。

真実を推し量る事はできなくとも、背から伝わる事実は間者として教育された自分を嘆息させるに十分だと認めざるを得ない。

フィオの口から漏れたのは、答えでもなく、かといって意味のある質問でもなかった。

「強くなられたんですね」

ただ漏れでた言葉への返事は沈黙で返し、アイラはそれ以上口を開かなかった。

そして、フィオにもそれ以上自ら語れる事はなかった。

沈黙がどれだけお互いの心を削っただろう。

最後まで沈黙を保ったフィオに対してアイラが持ちかけたのは恭順でもなければ服従でもなかった。

「まあ今は事実を教えてくれなくてもいい。だが、私は私で動いているから、フィーに邪魔して欲しくはない」

私も無茶をいつているな、と苦笑しながら吐き出された言葉は、

「貴女は馬鹿ですか」とつい口に出してしまいたいほど滑稽な内容だった。

「だから取引をしないか」

「父が……国王が崩御し、その後の情勢が見えるまでは、私にも兄にも、手を出さないでくれないか。私たちのどちらが居なくなつて

も、どちらが優秀かをハッキリせずに王位についてしまうのは、いずれエストという国を内側から滅ぼす事に繋がる。少なくとも私はそう考えている。

だから、お前が殺すべき相手と、そして選ばれるものがどちらにしても、私たちをその日まで生かしてもらえないか」

アイラの提案の意味を、飲み込む事はできた。
けれど、フィオに返す言葉はない。

言葉どころかどうすればいいのか考える事も出来ず、ただ頭の中の熱が強くなっていく。世界は白い光でやたらと眩しく自分を照りつけて、未熟な自分を晒し出しているような錯覚すら覚えた。

後々思い返せば、アイラの提案に即答出来なかったのは、彼にそれを判断するための情報が与えられて居なかったからだ。特定の状況下で人を殺す術は教えられていても、人殺しの組織を束ねるような考えはフィオには与えられてこなかった。それは人として生きていなければ、自ら思いつくものでもない。

そして、理由は教えられていなくとも、なぜ彼がこの時期に送り込まれてきたのかを察すれば、どちらにしろ色よい返事など返せないのは明白だ。

『もう一方の王権を確固たるものにする』。

その為には国王が死んで争いが起きてしまつては手遅れなのだ。だから、フィオにはそもそも選べる選択肢などただ一つしかなかった。

自分の出身を知っているアイラに、自らの存在が気づかれてしまった。

そして、アイラの視線の色が示しているのは、疑いではなく信頼の緑。

その2つを認識した瞬間に体が動き始める。

後ろ回し蹴りの要領で、膝裏にアイラの体を巻き込むようにして体全体を捻^{ねじ}る。腰の部分を縛られているために、腰椎が折れ曲がりそつな激痛を感じるが構わずに振り切る。

剣で斬られるかも知れないが、落ちていく方向から逆らうように剣を抜くのは至難の業だ。体制を崩したアイラの顎に、落ちながら肘を打ち込めば、気を失わせてその間に逃げる事ができる。

そのまま首の骨でも折ってしまうつもりで放たれた全力の一撃は、しかしアイラの体が容易く受け止めていた。

「なっ」

「そう無理な体の使い方をするんじゃない。アレの影響で育ちきっていないお前の体では、私はビクともしないぞ」

打撃ではなく押し出すつもり足技を、折りたたんだ腕で受け止められていた。それどころか足できつく馬を締め上げることでアイラは上体を揺らすこと無く佇んでいる。

馬が苦しそうに嘶いているし、どんな馬鹿力ですか……。

数秒硬直しながら呆れたフィオは、アイラの手が剣の柄に触れるのを見て今度こそ本当に万策尽きたのだと観念した。

けれど、フィオはこれから更に彼女の豪胆さに驚くことになる。フィオが呆然としている間に腰の剣を軽く抜いたアイラは、お互いを結ぶ縄を切り裂いたのだ。

つまり、アイラはこう言っているのだろう。

全力でやってみろ、と。

悔しさも屈辱も感じなかった。後ろ向きな思いに心が捕われるよりも早く、フィオの中に怒りが湧き上がった。

体のバネだけで飛び上がると馬から数歩離れた位置に着地する。

フィオが構えをとるのを見て馬から降りたアイラは、ゆっくりと腰の剣帯を外しながら、言った。

「さて、私がどれだけ強くなったか。君にも見てもらいたいなフィオ」

「余裕ですね、アイラ様。このまま私が逃げるかもしれませんが」「殺し屋が任務失敗して逃げたところでどこに行くと言った。私をまだ世間知らずのお嬢様だと思ってるのか？」

肩を回しながら本気で怒った顔で、王女はこちらを指さしてくる。

「幼馴染が様付けなんかで呼ぶんじゃない。あの頃も呼び捨てにさせるのに散々苦労させられたが、私はまた同じ苦労をしなければならんのか？」

そうじゃないだろうという思いと、懐かしいという思いが同時に去来する。

従者の家系に生まれたフィオは、避暑として訪れていたアイラ達に対して敬語で付き従っていた。それは至極当然の事だったのだが、何度命じられても言うことを聞かないフィオを、アイラは木の実集めというかわいらしい勝負で打ち負かし、勝者の権利として自分を呼捨てで呼ぶようにフィオに命じたのだった。

フィオにとっては純粋な人としての生の最後の輝きだった。

それをアイラが覚えていることに一抹とはとても言えないほどの嬉しさを覚えたが、それも目の前で不敵に笑う彼女を見れば、怒りにかき消されてしまう。

「もう二度と、チコの実取りで遅れは取りませんよ。もちろん、腕っ節でも」

「ルールはあくまで素手だ。これは君にとっては対等だが私にとってはハンデだ。頼みにしている剣を手放すんだからな。よって、私が勝ったら君に2つ言うことを聞いてもらう」

自分に対して付き出した一本の指を二本にする。

(こういう形式から入る所は昔から変わりませんね……)

内心若干気落ちしながらも不利な約束をするわけにはいかない。

「2つ、ですか？」

「そう2つだ。勝者の権利が一つ。そして同じ条件で戦ってやることで一つだ」

「戦ってやる」の一言が更にカチンと来る。

フィオが思い出せる限り、幼い頃のアイラは徒手空拳ではフィオに一度も勝つことがない。

すっかりした騎士の流儀を習っていたアイラにフィオが勝てたのは、彼がアイラの癖を見抜いていたからだだった。

今でも思い返せばその時の事を思い出せる。そして成長した体でリーチは変わったものの、彼女の構えは昔と寸分違わぬ癖が出ている。

武器を左の腰に下げているからだろうか、左の肩が下がっている癖がより顕著になっていてのを見て取ってフィオも腰を落とす。

湖から流れるひととき強い風が吹き当たった瞬間、フィオが体を低くして飛び込んでいった。

腰よりも低い位置に拳を届かせるには腕を上^{アッパー}に引いての叩き落し^{チョッピング}か、相手の下からの突き上げた。

身長差を考えてもアイラは拳を使うのなら振り下ろすしかないが、腰だめに据えている右を引き戻すほどの余裕はない。

となれば、来るのは蹴りだ。

幼い頃と同じ狙い。フィオはアイラを一撃で地に伏せさせた記憶をイメージする。

だが、アイラも彼と同じことを覚えていた。

右拳を正拳ではなてるように左足を前にしていたアイラは、左足を体半分後ろに引いて重心を移した。

フィオが左足に視線をやった瞬間、浮いた右足でフィオを踏み抜く軌道の蹴りが放たれる。

壁をも粉碎できそうな勢いの一撃が急速に顔に迫るが、フィオは動じなかった。

視えているものに対して体が動くのであれば、怖れることはない。8年前、この大陸を襲ったあの災厄。その際に望みもしないのに備わった彼の力。

相手の視線が視えるこの力は潜入任務にも便利だが、近距離の格闘戦でも無類の効果を発揮する。

アイラは昔と同じ構えをとった瞬間から、自分の体よりも右側に意識を集中させて視線を送っていた。

さらに、右足で踏み抜くために左足を下げる先の地盤をも確認し

ていた。

狙いがわかつていいる攻撃を誘発させる事は、フィオにとって難しいことではなかった。

攻撃を確認した瞬間、体をはねおこして宙に舞った。

「っ！」

体を捻るように飛んだ彼女は全力の後ろ廻し蹴りをアイラの顔面に向けて放った。

けれど、直撃すれば首の骨に異常が出るほどの破壊力で放たれた蹴りはまたしても防がれていた。

両うでを交差させるように顔の前に突き出す事で、拳を壊すこと無くしかも両腕に分散して蹴りを受け止めていた。片足で受けたためによるめいたものの、すぐに右足を引き戻して腰を落とす。

先程は片腕で受けられたものが両手になっている時点で本気のフィオの一撃がどれほど違うかは明らかなのだが、必殺の一撃を防がれてしまうとさすがのフィオにも動揺が走る。

続く一撃が放てずに着地したフィオに対して、アイラは声もあげずに構えをなおすと改めて右の正拳をつきだす。

一瞬、手元が発火したのではないかとフィオは錯覚した。

それほどのスピードで放たれた拳は受け止めず、左の拳で内側から弾く。

腕を内から外に弾くように打つことで軌道をずらす技術は、「相手の拳撃を如何にして受け止めるか」と研鑽を積んでいる騎士達の流儀にはない。

蹴りを受け止められたフィオに続いて今度はアイラが驚く事になった。

同じ隙がアイラを襲うことはない。直感で悟ったフィオは決着を付けるために一足でアイラの懐に踏み込んだ。

アイラの顎を下から全力で打ち上げるように、右の拳でアッパーを打ち込む。

届いたと思った瞬間、急激に暗くなった。

痛みを感じるより先に、悔しさが募る。

届かなかった。

首に打ち込まれた感触から何度目になるか分からない諦めを覚える頃には、既に足に力が入らなくなっていた。

地面に倒れこみながら光が失われていく意識の中、フィオはアイラの声を聞いた。

「すまない。だが今度こそ、私がお前の事を何とかしてやる。だから今は眠ってくれ……」

その言葉の意味を理解することは出来なかった。

目が覚めた時、ただでは済むまい。

ほぼ確実に罪人を囚える北の尖塔に送り込まれるだろう。

覚悟を決める間もなく、フィオは意識を手放した。

自分の父が誇りだった。

彼女に出会うまで、心の中で一番崇高なモノは常にソレだった。

父親の居ない食卓で母が父の職務の素晴らしさを何度も話してくれたから。

嫌でも空いてしまうその席がたまに埋められる時の幸福感からだけ、与えられてきたその誇りは、自分で見つけた太陽より高くはなかった。

彼女達が来た。

自分も父を見習って彼女たちを守らなければならない。大人相手では無理でも、日頃飛び回っているこの山と森で、彼女達が怪我をしないようにはしないといけない。

そう思っていていつも列の最後尾を必至に走って付いていった。

背の高いお兄さんたちも居たけれど、一番前を走るのがまだ小さいアイラだったので、自分もついていった。

一年目の景色は、常に端っこからのものだ。
変わったのは次の年から。

湖で遊んでいる皆が見える位置で日向ぼっこをしながら寝転んでいると、いきなり顔に水をかけられた。

「おい、お前！」

自分を覗き込んだその顔を、今でも覚えている。

「私と、勝負しよう！」

はじめに感じたのは自分を包む優しい温度だった。

背中が何か暖かいものに寄りかかっている。まるで母親の膝の上

に居るみたいだと眠りの中で思う。そして自分の手を包む優しさにもどことなく懐かしさを感じる。

しばらくその感覚に浸りながらこの優しさは何なんだろうと問いた瞬間、一気に意識が覚醒した。

習慣で目を開けずに気配だけで周囲の状況を感じ取る。

妙に柔らかい場所に寝かされているが、かなり開放的な場所にいらしい。気持ちのいい風が体を撫でていく。人の気配は自分の頭の後ろに居る一人のみ。

恐る恐る目を開けてみれば、そこにいたのは予想通り、彼の幼馴染だった。

「おはよう、フィー。やりすぎてすまなかったな」

「……おはようございます、アイラ様。ところで、この状況は……？」

気を失う前に考えていたことを思い返す。

ラトリア城は山を繰り抜くように作られてはいるが、やはり大規模な地下施設を持つのは難しい。

そのため、罪人を投獄するための牢は断崖絶壁に建築された塔が用意されている。

自分も勿論の事、目が覚めたら悪名高いその塔に叩きこまれているものだと思っていたのだが……。

フィオは王女から警戒しつつも視線を外し、部屋を観察する。

どこことなく質素すぎる部屋だったが、数少ない調度品は全て一級の物が揃っている。特に今寝かされているベッドは格別すぎる。こんなに柔らかいベッドで、こんなにさらさらとした抵抗の無いシーツは初めてだ。

ともすれば、答えなど問わずとも決まっているのだが、フィオの考えを先読みしたかのようなタイミングでアイラが勝手に答えていた。

「気にするな。私の過激な馬捌きに気を失ってしまった少女を私が直々に看病している。という事になっている。ここは私のために用

意された城の裏にある別棟だ」

自慢気に胸を反らせているアイラの顔は、彼女の膝の上からでは確認できない。

相変わらずズレた人だと思いながら、フィオは嘆息しつつも体を起こした。

首元がやや痛む。自分で触ってみて気づいたが、首の前面側、気道の左右にある血管の辺りが酷く痛む。肌を出さないために首元まで隠れている侍女服のお陰で傷は露出していないが、多分相当ひどくアザになっているはずだ。

呼吸と血の巡りを止め、意識を失わせる人体の弱点。まともな武術のみを習っていれば知らない知識だ。

アイラがそれを知っていた事にもフィオは驚いたが、高速で飛び込んでいった自分に対して、的確に反応したことに更に驚ろかされる。

彼が推測した通り、アイラは親指と人差し指を開けてYの字で喉を突いたのだが、上体から飛び込んでくるフィオに対してアイラからは喉元が見えなかった。その状態で的確に人体の弱点をつけたとなると、彼女はこの手の技術についても一流のものを身に付けている事になる。

これらの事実気づいたのが介抱された後だというのだから、刺客としては情けない事この上無い。

無いが、恥じるよりも先に知らねばならない事がある。王女の命を狙った刺客が何故こんなところでのうのと寝かされていたのか。「何故、私を生かしておくのですか。私はアイラ様を」

「そこまでだ、フィー」

けれども、振り返って相対しながら紡いだ言葉は首元に押し当てられた剣で塞がれてしまう。

座った状態から一瞬で距離を詰め、フィオの肩を抑えながら押し倒し、逆手にもった剣を彼の喉に触れる位置で支え留める。

決闘の際に抜かなかったその剣は、フィオの予想をはるかに上回

る美しさと、そして実用性にあふれていた。刃の腹は磨かれていて鏡のように透き通っていたが、数多の傷がこの剣の過去をも証明している。

軽く首に触れただけでも薄皮が裂け、うつすらと液体が滲んでいるのが分かる。彼女が少しでも力を入れれば、喉元を裂かれる事は想像に難くない。

緊張から全身が軽くこわばるフィオだったが、肝心のアイラは人を殺せる剣を構えているなどとは微塵も思わせない微笑を浮かべて言った。

「約束のことは覚えてるか？」

一瞬、十年前の記憶が彼の頭をよぎった。

直ぐ様思い直して（どれくらいの時間が経過しているか分からないが）先ほどの決闘の発端を思い出す。

とはいえ、約束をしたという事以外アイラの真意はつかめていない。

フィオに返せるのはオウム返しのような意味のない答えだけだ。

「貴女の命を訊け、というのでしょうか。私が聞き入れられる事でしたらお聞きいたします。ですが、雇い主のことを話せと命じられても何一つ漏らさないことは、予め断らせて頂きますよ」

恐らくそれが目的だろう、と目星をつけてアイラを睨みつける。

端正に整った顔を歪めた王女は、目の前でほとほと残念そうな顔で溜息をついた。

「お前がどこの刺客だとかそんな下らない事はどうでもいい。まったく、寝言で私の名前を呼んでくれたからてっきり分かってくれるものとはばかり思っていたのに……」

「……う」

思わず顔が赤くなるのを自覚する。起きた途端に忘れてしまえれば良かったのに、残念ながら夢の内容はわりとハッキリ覚えていた。彼が呆然としている間にアイラは体を一旦離すと、手を引いて上半身を起こさせる。

何をするつもりのか。彼がじつと見てみると、王女は二人の間に刃を下にするようにして剣を突きだしてきた。

鰐の部分を顎でさして「支える」と言われ、横に伸びた鰐を下から両手で支えるようにして持った。

王女は自らの剣に親指を強く押しあてながら、まるで式典における教会長のような厳かな声で口にした。

「一つ。必要な時を除いて、私のことは様をつけずに呼び捨てること。もう一つ、私の侍女として仕えること。あの決闘と、私の剣と魂に誓って他のことは要求しない。そしてお前のことを誰にも漏らさぬと誓おう」

自らの血が十分に剣を流れると、アイラはその指を離した。そして柄の部分を支え持ち、刃の反対側をフィオに差し出す。

実際にやったことは一度しかないが、フィオはこの儀式を知っていた。

古くから伝わる剣士の誓約。剣を奉納の対象とする戦の神タリフエスに、剣士の魂である剣を証として誓約を誓う。

今ではめつきり使われなくなっている古い習慣で、エスト王国では騎士団長の就任式典の際に国王と団長が行う以外は正式には行われていない。

そんな重々しい誓約をいきなり何故……と混乱しながら、勢いのままに自分の手を伸ばしかける。

慌てて首を横に振りながら手をひっこめて、王女を問い詰める。

「暗殺者だと知ってなお私を仕えさせるなんて……何が狙いなんですか」

「いやあ、女っぷりが私より様になってるなフィー。なあに、理由は簡単だ。普通の侍女じゃ私にはついてこられない。レミダンの山賊退治の話は聞いたことないか？」

「……領主が手こずっていた山賊をアイラ様が殲滅なされたという……」

齢15にして王女が剣をとって先陣を切り、廃棄された砦を根城

にしていた山賊団を攻め抜いて砦を陥落させた……という愚にもつかない噂話のような実話の事はフィオも耳にしていた。

フィオが「それがどうした」といった表情で返せば、アイラは苦々しげな顔で首を振った。

「戦に出るというのに、やれ身の回りの世話をする女だの、湯浴みだのとふざけた事ばかりに気を回される。それでいて部屋には剣を研ぐための道具すら用意されていなかったんだぞ！信じられるか！結局地方の貴族の家で湯を浴びて、そこを早朝に出てまた軍に合流だ。小さな山賊の集団相手だったから良かったものの、これが他国の正規軍との戦だったらどうなっていると思う！」

そうじゃないだろう。という正直な思いと侍女長の苦勞に涙を忍ばせるものの、握りしめた拳を豪華なベッドに叩きこむアイラに生半可な反論は出来ず、フィオは必至に顔を縦に振った。

「そこでだ。私に侍女としてお前が付いていてくれれば、うるさい元老連中は黙らせられるし、腕のたつ奴が横にいてくれる。こんなに安心することは他にないだろう」

アイラがどうだと言わんばかりの笑顔を浮かべる。血のしたたした剣を支えながら。

この常識知らずが、と心の中で罵りつつも、確かにと思わないこともなかった。

フィオ自身は戦場を経験したことはないが、剣で人の首を刎ねた事ならある。

また、高貴な人間は戦場にて近くに小姓をおかせ、武具や取った首などはそれらに持たせたりする事も知っていた。小姓たちは武器も扱えないような者たちがほとんどのため、戦場では自らの身を守る事も出来ずに立つことになる。

側仕えが武器をとれるのであれば、どちらの立場にとっても良い事だ。

その側仕えの責務に、身の回りの世話がなければ、だが。

「……私が男であると分かった上で、身の回りの世話をさせる、と

？」

王女が戦場に立つのがおかしいことはさておくとしても、女性の身の回りの世話をするのは、当然の事ながら小姓ではなく侍女だ。

だからフィオも男としてではなく、女として城に潜入したわけだが……男が女と偽って王女の世話をするのも既に大罪だが、正体が男だと分かっているならなお側におくのも正気の沙汰ではない。

ならば、なぜ。

流れ始めたアイラの血は遅々とした速度だがゆっくりと刃を伝い、剣先に溜まり始めている。

誓いを立てるのか。抗うのか。

その全てを貴女の応えに任せたいと念じて、フィオはアイラの瞳を正面から見つめた。

彼女は信じるに足る幼馴染で、尊大だが賢い王女だ。けれども今の自分では自ずから仕える先を選ぶ力もなければ、その枷を外す事も出来ない。

だから、信じる。

陽の光を浴びて金のように光るその双眸は、燃える赤髪と絡み合っ

って眩しいほどの輝きを湛えていた。

挑むようなフィオの視線を正面から受け止めて、アイラは応える。「世の中を、どうでもいいものとそうでないものに分けるとしたら、お前は後者だ。フィーがフィーだから、私はお前を側に置く」

その答えが、フィオの欲しかった答えと同じだったのか。

違えども納得させるだけのものだったのか。

フィオはそれを明かさなかったし、アイラも答えを知ることとは無かったが、今もその後も、二人にはフィオの応えだけで十分だった。フィオの指から流れ落ちる血が、剣先で一つに交わる。

その重みで血がシートに滴る前に、アイラは剣先を鞘に納めた。

「……血の雫を杯が何かで受け止めるのが習わしなのではありませんでしたか？」

「お前と私の血はいつでも私たちがこれから流す血と一緒にだ」

一緒に背負えという事ですか、と肩を落とす。なんと気軽にとんでもないものを背負わせてくれるのだろうか。

フィオが頭をうなだれている間にベッドから立ち上がったアイラは、自然な動きで剣を腰に下げてフィオに手を差し出した。

「精々、血に汚れたシーツを処分する作業がなくなっただけでも良しと致します」

少しだけ赤くなった顔でフィオも手を握り返す。

アイラは苦労する気配もなくフィオの体を引き起こした。六年前は同じ背丈だった二人も今はこんなに差がある。

彼女と同じ時間を過ごせていたら、今の自分はどうなっていただろうか。

もはや肩どころか正面から見つめると胸が正面にくるくらいの身長差になってしまった幼馴染を、若干のうらみを込めながら見上げる。

アイラが面白そうにこちらを見ているのも若干癪に障った。

この程度の事で心を見だしてしまうなんて、今まで刺客として鍛えられた自分はどこに逝ってしまったのか。

そう思いながらもこの程度の事で自分の心を掻き乱せるアイラという存在が、それほど大きく、そして期待に似た何かをはらんでいるという確信も有った。

今は、答えを出すのはやめよう。

彼女についていけば、いずれその答えが手に入るはず。期待しているものは分らないがそれだけは確実だ。

とりあえずの答えを胸の内にしまい、フィオは服装を整えて言った。

「まずは、ミリアム様に報告に参ります。私一人では止められてしまいますから、一緒に来て頂けますね？」

「それは構わないが……おい、敬語はやめる約束じゃないのか」

「おや、誓ったのは貴方様を呼捨てに事だけではありませんでしたか、アイラ」

何かが喉につつかえた様な顔でアイラの体が一瞬強張る。

ふむ、と一瞬何かに納得して首肯すると、おもむろに剣の柄へと手が伸びる。

「ではもう一勝負といこうか」

「ご遠慮させて頂きます。それとも素手の相手に剣をお抜きになれるおつもりですか？」

言いたいことだけ言ってフィオはアイラに背を向けて前を歩き始める。

まったく、正面から勝負を受けてもらえないと弱いのは昔のままなのです。

10年前の風が胸の内から触れてくる。

してやった心地よさを表にはださず、侍女を追いついて大股で歩く王女を早足でおいかけていった。

城勤めの侍女の朝は早い。

自領の土地を管理するだけの小貴族や女性貴族の大半は、昼過ぎに起きだし、夜遅くまで社交界という名の遊興に耽る生活をしている。彼らに仕える従者たちもまたそのリズムに合わせて生活することになるため、必然的に朝早くから活動することはない。

しかし複数の領を統括する上位貴族はそうはいかない。仕事の量が増え、昼からで終わらないのであれば朝からやるしかない。そして彼らの大半は情報の中心であり王都であるラトリアに登城しているため、ラトリア城で勤めを果たしている従者達は地方貴族の従者よりも勤勉に働かねばならないのだ。

そして侍女長たるミリアムは侍女の中でも最も早くから起きだして働いていた。

今日の一番初めの仕事は、一の郭の中に住む娘を侍女として連れてくるものだったが、アイラの登場によって関連する仕事は全て取りやめにせざるを得なかった。

なんとか日常通りの業務はこなすものの、一番頭が痛いのは放蕩振りが極まっているライアス王子に、侍女が居なくなった説明をどのようにつけようかという事だった。のだが、昼を過ぎた辺りで件の元凶が更なる頭痛の種を連れてやって来た。

失神したフィオをアイラが担ぐようにして帰ってきたのだ。

「フィオ!？」

年甲斐もなく若い娘のような声で驚くミリアムを、アイラは空いた片手で御して言った。

「失神しているだけだ、死んでない」

そういう問題じゃない!とは、恐らく言っても通じないだろう。アイラは自分に関することであればとかく無茶をするが、今までついていけなかった侍女たちも不慮の事故などには合わないように

最低限ではあるが気をつかわれていたのだから。

他人を納得させられるような理由付けではなかったが、ミリアムはフィオが無事であるならば息災と自分を（無理やり）納得させる。なんといい訳して医務室に彼女を連れていこうか侍女長が考えている間に、機先を制すのが得意な王女はもうひとつ頭痛の種を巻いて去っていた。

「この子は私の侍女にする。起きるまでは棟で休ませるから、まだしばらく預かるぞ」

それだけ言うとは啞然としているミリアムを置いてアイラは侍女長の執務室を去っていつてしまった。

心の中でフィオに深く詫びると、ミリアムは机へと戻り腰を落着ける。

不幸中の幸いだが、昨晚のライアス王子はアイラの言うとおり下町へ降りて遊女と一晚を過ごしていた。日の出前に帰ってから眠ったままで、この分だと起きてくるのは夕方になるはず……。

「であれば、アイラ様がライアス様に直接お話を付けていただけるのが一番助かるというのに……」

恐らくそれは叶わないだろう。ないがしろにしているわけではないだろうが、アイラはどうもライアスが眼中に無いようだ。ミリアムは常日頃やきもきしている。

当然のことながら王族としてのプライドを持っている王子の事だ。今まで何人もの侍女を（精神的に）潰してきた王女が自分の寝屋を共にするはずだった美少女を連れていったと知ったら、どんな苦情を言いに来るだろうか。

火の粉が降り掛かってくるのが分かっているのなら、火傷をする前に自ら振り払いに行かなければなるまい。

ライアス付きの侍女に彼が起きたら伝えるように言い渡すと、ミリアムは侍女長として各仕事場の監視の為に城の中を歩きまわった。

各所を見てまわり、その進捗を確かめては次の仕事場へと向かう。それぞれの仕事場を任されている侍女達の状況を確認し、他部署との取りまとめを行うのが彼女の侍女長としての仕事の一端だ。

一流の貴族であつても侮れない年季の入った経験と人脈の繋がり
で、ミリアムは様々な問題を片付けつつ城内を一周した。

浴場、洗濯場、厨房、針子部屋、各駐留貴族たちの寝室……数え
上げれば暇がないほどの距離をいつもどおりミリアムは歩き詰め、
その全てが滞り無い事を確認する。

執務室に戻る頃には既に時刻は昼を過ぎており、吹き抜けの廊下
を歩けば熱と生気をはらんだ風が優しく身を打つ。

季節は春を終えて初夏を迎えようとしていた。城から見える山の
斜面には一面に緑の葉が広がり、太陽の光を浴びて踊るように風に
揺れている。

どれぐらいその風景に見とれていたのだろう。突然後ろからかけ
られた声で、急激に現実に戻された。

「調子はどうかな、グリーンヒル」

年経て低く乾いた声。けれどもその芯に揺らがぬ権威を感じさせ
る声の主は、誰あろうエスト国王ギルバルト「フォン」ノワールそ
の人だった。

「ご機嫌麗しゅう、ノワール様」

慌てること無く頭を下げたミリアムは、衣服の上からでも彼の足
が以前より大分細くなっている事に気づいた。

ミリアムが侍女として城に仕え始めたのは、ギルバルトが即位す
る前からだった。

まだ若輩と呼ばれながら王子として国交関係の改善を行っていた
若々しい姿も、国王として精力的に活動をしていた姿も、子供が生
まれた時の優しい父の姿も、全てを後ろから支えてきた。

齢も50を数える彼は老人と言っても差し支えないが、それにし
てもここ最近の体の衰えは尋常ではない。

威圧感を感じるほど力に満ち満ちた肢体から筋肉は削げ落ち、その状態であつらえた服は幅がありあまつている。

ミリアムがすぐに侍女の姿を探して視線を泳がせるのを見て取ったギルバルトは、手を上げてそれを制する。

侍女の名前など一々覚える必要のない国王としても、自らが王位につく前から侍女長として城の裏側を取り仕切るこの女性については、名以上に多くの事を知っていた。

「最近の調子はどうだ」

声にハリやツヤが無くとも、賢さが窺えるその言葉にミリアムは微笑を浮かべながら答える。

「全てつつが無く。何も問題はございません」

「ハッ、お前がそう答える事くらい分かつておる。では我が王子と王女については、どうだ。手を焼いていないとでも言うのか？」

ミリアムの応えを面白そうに待つギルバルトの表情を見て、ミリアムは喜びと心労をブレンドしたため息をつく。

「ええ、お二人ともますます血気盛んになっておられますよ」

国王に対してこのようなぞんざいな口のきき方を許され、また出来る女性などミリアムを除いて他には居ない。

堅苦しさと建前の無い率直な言葉を聞いて、ギルバルトは愉快そうに笑った。

「で、あろつな。全くもってお前には迷惑を掛けてばかりだ……だが、今の状況はさして問題でもないだろう。国にとって真の問題は、余が死んだ後になるだろう」

ギルバルトの言葉の中に隠された思惑は、はっきりとした形では表には出ない。

しかし、長といえどもこのような話は侍女にするべきものではない。

ミリアムは今一度、自らの仕える王の瞳を見つめ返した。

「その時、お前はこの城を真の意味で守ってくれると信じておる。何があつても、お前がエストだと思つたものを。お前が支えてきたラ

トリアを守れ。良いな」

王の体は確かに衰えているだろう。

それは本人も自覚し、隠そうとしないが故に、殊更に盛衰を意識させられる。

だがその心は、精神は未だ衰えていない。

眼光の鋭さとその奥から伝わる力強さを受け止めれば誰もがそう思うだろう。

「御意」

余計な言葉は要らない。ギルバルトではなく王として、ノワールとして生まれ変わって生きると決めた、若き日の王の幻影をその影に見て、ミリアムは頭をたれた。

短いその返事に満足したのか、ギルバルトは来た道を引き返していった。

急ぎもせず、かといって遅々とした歩みではなく。意思を持ってゆったりと進むその背中、少なくとも侍女長の目から見ればいつ見ても変わらない。

角を曲がるまでを見送り、侍女長は気持ちを引き締め直して執務室へと足を向かわせる。

「……御用をお聞きするのを忘れていましたね」

この先は城の端ある、侍女たちが暮らし、勤める塔があるだけだ。来た道を引き返すのであれば、何のために侍女たちがつめる棟へ来たのだろう。

その理由を聞くことはなく、ミリアムは次の仕事を思い出し、慌てて執務室へ戻っていった。

昼を過ぎて各部署の侍女達が持ちまわりで昼食を取り終わった頃。アイラがフィオを連れて執務室を訪れていた。

「ミリアム様、初日からご迷惑をお掛けして申し訳御座いけませんで

した」

誰よりも早くそう頭を下げたフィオに対して、ミリアムはアイラを一睨みしてから「頭をあげなさい」と命じた。

「フィオ、このお方の噂は市井の者でも聞いたことがあると思います。あなたに悪い所などないのですよ」

ミリアムの説得に応じてフィオは顔を上げた。その顔は理由はともあれ感情の昂ぶりを示すようにやや赤らんでいる。

「そうだぞフィオ。私の遠乗りは戦場を駆けるよりも激しいからな。今後こんな調子じゃ困る」

「……今、なんとおっしゃいました、王女？」

ピシッと引きつったミリアムが辛うじて声を絞り出し、アイラに問いかける。

アイラが生まれた頃から侍女長として城に務め続け、なおかつ王女の教育係を任されていたミリアムだからこそ、この王女の突飛な行動にも「慣れ」と言えた。

本来王女、貴族、いやどんなに力仕事をする農家の女でさえ、彼女のバイタリティにはついていけないはずもないのだ。

だというのに、貴族生まれで城勤めを推薦されるほどの真面目な少女に向かつて「今後も馬を乗り回すからついて来い」などと。

「どの口が言うのですかっ！」

ミリアムの発した怒声にアイラが思わず一步を引きかけ、フィオもその口から稲妻が放たれるような錯覚を覚えた。

（これはさすがに…… フィー、お前の出番だぞ）

（わ、私には荷が重いのですけれど…… 分かりました）

さすがのアイラも胸を張り続けるわけにはいかず、若干肩を落としていたが、それでも前言を撤回しない王女に対して侍女長が説教を始めようとする。

そこに絶妙なタイミングで、横からフィオが割り込んできた。

「ミリアム様。私もアイラ様の側仕えとして働きとうございます。どうかお許し頂けないでしょうか？」

「そうは言っても、この人の実際の行動力と言ったら噂など鼻で笑ってしまえるほどですよ。今日の様子をみる限り、あなたにはとても」

「アイラ様の遠乗りだけでしたら、私も大丈夫です。ただ、その…今日は予想外の事態が起こってしまっただけです」

ミリアムの刺すような視線に、肩をすくめてアイラが返す。

必至なフィオはそれには全く気づかぬ様子でつつかえながらも話し続ける。

「現在アイラ様には、その侍女が仕えていないとの事ですし。あの、ミリアム様もご苦みなさられているとお聞きました。私では力が及ばぬとは思いますが……無理、でしょうか？」

若干瞳に涙すらためて訴えるフィオをそれ以上責める事も説得することも侍女長には出来なかった。

確かに、彼女の言うことがもつともであるのは認めざるを得ない。いつまでも王女に侍女をつけていないでいられるわけがないのだ。アイラも既に齡19を迎えている。王女としてはそろそろ婚期も限界だし、仮に隣国に嫁に出すとしても侍女が一人もついていかないというのは言語道断だ。

最悪の場合、侍女長の職を持して自分が……と思わなくてもなかったが、本人にやる気がある若い娘が付いていくれると言つのならそれにこしたことはない。相手が普通の女だったなら、だが。

何はともあれネックになるのはアイラの無軌道ぶりだ。どれだけ出来る娘でも、アイラの侍女を、しかも一人で他分野を見なければならぬのは挑戦が過ぎて無謀だ。

だが、ミリアムは同時に侍女になりたてた頃の事を思い出す。そして侍女長としての責務を受け賜った時の事も。

右も左も分からぬまま付けられた当時の王子。数年して立派な王となり、そんな王が国を支えるための城を支えようと、必至に生き抜いてきた。

自分のしてきた事に自負がある。皆を支えているという意思もあ

る。

そして、目の前の少女の言葉にも意思があつた。

伝統やしきたりを後進に強いて、無茶をさせるのはミリアムの本意ではない。

だが、自分の内を鑑みれば始めにあつたものはなんだつたらうか。必至に頼み込んでくる若い娘と、自らの判断に自信を持って揺らがぬ若い娘。

「……分かりました。認めましょう」

それならば、私が彼女たちのためにすべき事は、自ずと一つしか無かつた。

花が開くかのように喜びの表情を浮かべるフィオとアイラの表情をみやつて、

「ただし！」

それでも、彼女は侍女長なのだった。

「フィオは無理だと思つたらすぐに私に伝えなさい。交代制でも何でも、王女のために協力は惜しみません。そしてアイラ様も、フィオに無理をさせてはなりませんよ。今まで貴女様に付き従つて心折れた若者がどれほどいたか、思い返すように」

「あ、ありがとうございます、ミリアム様！」「助かるよ、ミリイ」まるで子供の様に嬉しそうに笑顔を浮かべる二人を見て、ミリアムは自分でも気づかぬ内に笑みを浮かべていた。

この二人が、上手くやつてくれる事を、今は祈ろう。

フィオがアイラについていくことが出来て、そして王女としての勤めを果たす時がくれば……彼女にはアイラの力になって欲しいとミリアムは願つた。

自らの生まれのみでその身の落とし所を決めねばならない”王女”。

アイラはその枠に収まらないだろうと思わせているが、そこは彼女として女なのだ。必要な分だけの礼儀は身につけている。

もしそうならなかつたとしても、フィオが侍女として成長してく

れば、自分がこの次に推薦しようとしている侍女長の、更に次なる候補の一人となってくれるだろう。どちらにせよ、彼女自身が侍女という身分を離れて生きる選択を選ぶのでなければ、この城と、国を支えるための大きな柱になってくれるのは違う。

ひとしきり理想の未来を想像した侍女長はそこで意識を切り替えた。

さて、ではそのためにまずフィオには何を覚えてもらうべきだろうか。

寝所を整える事から服装、さらには式典に出る彼女のフオーももちろん必要だ。知らぬ間に離れを抜けだして食事を済ませて料理長を泣かせているのもそろそろ終わりにさせてあげて欲しいところだ。

とりあえず、まずは目の前で王女というには実用的にすぎる服装をしているアイラを一睨みして、

「ではフィオ。まず貴女には」

王女に相應しい服を、と告げるつもりだったセリフは唐突に開いた扉で遮られた。

壊れるかと思うほどの勢いで開かれた扉の前に跪いていたのは、ラトリア城を警護している近衛兵だった。

その顔は血が通っていないのかと思うほどに蒼白で、

「何用か、述べよ」

この異様な事態に対して真っ先に動きを見せたのはアイラだった。ミリアムの前に立ち、腰に下げた剣の柄に手をかける。

近衛兵に向かって剣を向けなければならぬ警戒せねばならない理由がミリアムには理解出来なかったが、フィオは気づいた。

近衛兵の身につけている金属の具足に、血が付着していた。健康的な赤みがなく、どこまでもどす黒いそれは一体何から浴び

たものなのか。

「ギ、ギルバルト国王が……執務中に血をお吐きになられっ……息を引き取られました！」

近衛兵の言葉を最後まで待たずに、アイラは風の様な速度で部屋を飛び出していった。侍女はミリアムが近衛兵を支えるのを確認すると、アイラを追いかけるように……けれど王女とは逆に角を折れ、こちらもまた風のように駆け出すのだった。

アイラが国王の執務室の扉を蹴破るようにして開け放つ。

近衛兵の様子から間に合わないかと心配しての全力疾走だったが、国王がこちらに対して顔を向けたのを確認して僅かばかりの安堵を得る。

「父上！」

床に臥せっている王の傍らには腹心の執政長官が居たが、彼も医者と呼ぶだけしか出来ず、手をこまねいているようだった。

だがそれを責める事は出来まい。王の服は本来の色彩を失ってどす黒く染まっている。これほどの血を失えば、意識を保っているのがそもそも奇跡だと言える。

「アイラか？」

焦点の定まらぬ目でアイラがいる方向を睨んだ王は、立ち上がる事が出来ずに手招きをする。

誘われるがままに駆け寄り、王の左に膝をついた。

「はい。私です、父上」

血の気が失せた父の顔に目を逸らしそうになるが、ギルバルトの左手を強く握って視線を戻す。

アイラの手を強く握り返してから、王は目を閉じて言った

「サルバよ、聞け」

「はっ、何でしょう、我が王よ」

執政長官がアイラとは逆の側に膝をつき、右の手を取った。

ギルバルトは途中で幾度も声をかすませたが、決して止まること無く宣託を下した。

「次の王は、アイラ、だ。クラウドではない」

その言葉を聞いて、王女の体を何かが強く打ち付けた。

父上、と想う言葉は声にならなかった。

ギルバルトはサルバが取っていた右手を強く握る。

「忘れるな、友よ。あの山の麓で過ごした日々をな」

「……仰せのままに、陛下」

その答えに満足したのか苦しそうな顔を少しだけほころばせ、ギルバルトはサルバの手を離してアイラの握る左手に右のそれを重ねた。

「父上。私で、宜しいのですか」

「……良いか、アイラよ。いずれ我々が、地上に戻るその日が来る。その時までラトリアの灯を絶やしてはならん。地上には友がいる、まだ見ぬ隣人がいる。ラトリアの国と民を大地に戻すまで、我々王族は……っ！」

ギルバルトの口から大量の血が吐き出される。

その大半はアイラとサルバにもかかったが、目もくれなかった。

「せめて、生きている間に地上にと願っていたのだが……そうも行かなくなったか」

もはやギルバルトの手に力はなかった。

自然と落下する力に任せて、腕は落ち、瞼が下がる。

「皆にすまぬと伝えてくれ……アイラよ、お前の望むエストの、未来を」

最後の言葉が、はつきりとアイラの耳に入る。

大きく息を吸い、永く吐く。

一瞬、父の顔が歪んで見えた。

ハッと顔を上げてみてみるが、父の顔からは血の気がどんどんと失せ、表情も眠るようにならなくなった。

涙によるばかしだったのだろうか。それとも、厳格な父が最後に感じたものは幸福だったのだろうか。

甘いな、と自分でも思う。

神災から6年、荒れた国を治めることが、どれほど父に負担をかけていたかは考えるまでもない。

それでも。

私^{わたくし}という心を閉じて王という個人に生きていた父が、最後に笑みに浮かべたのだと、信じたいと思った。

そして忘れないために目を閉じてその光景を目に焼き付ける。

この瞼を開けた瞬間から、彼女はただのアイラではなくなるのだ。父のように、そして王のように。

王が死んだ。

それは自分にとって確かに衝撃的だが、このまま膝について頂垂れていて良いわけがない。

こうしてゆつくりと立ち上がる間にも、いくつもの事案が頭に浮かんでは形を作っていく。

その中でまず始めにやらなければいけないことを絞り出して行く。父の最期のように大きく一つ息を吸って、長く吐き出す。

やるべき事は明白だった。

息せき切って執務室に駆け込んでくる数人の男たち。

ゆつくりと振り返ってその先頭にいる男と視線をぶつける。

エスト王国の第一王子。本来であれば王位の継承権を持っていた男がそこにいた。

「父上っ！」

クラウスとその取り巻き達は、ほぼ全員の顔が蒼白になっている。王子の顔も同じように土気色だ。

自分も同じような顔をしているのではないかと思いはするが、すぐに気弱な心を封じ込める。

これからやらねばならない事をする上で、その様な態度を見せることは失敗と死に直結するからだ。

アイラは兄に場所を譲って一步を下がりながら、静かにサルバの前に立つように反対側へと回りこむ。

取り巻きたちはそこで膝を付くことを想像していたようだったが、アイラは立ったまま腕を組むとクラウスを見下ろし続ける。

「王子。父上は……前王は息を引き取られた。父の遺言は何だったかな、サルバ」

アイラがサルバを呼捨てにしたことに、クラウスが眉を立てる。父が亡くなったというのになぜか余裕すら感じられる傲慢な口調にも違和感と不愉快を感じ、クラウスは父の手を離すとすつくと立ち上がる。

執政長官の方を振り返りもせず、クラウスに正対したまま彼女は言葉を待った。

サルバはゆつくりと目を閉じて、周りの意識が自分に集中したと感じた所で、

「次のエスト国王に、アイラ様をご指名なされました」

深々と頭を垂れながら、けれども全員に聞こえるようハッキリと告げた。

クラウスは口を開けたまま立ち尽くし、彼の後ろに控える者達も同様だ。

いち早く反応を返したのは、クラウスの真後ろに控えていた男だった。

「王位の継承権はクラウス王子が持っていたはず、アイラ王女の騙りでは御座いませんか？」

その一声を皮切りに、取り巻きが次々と喚きだす。

「証拠はあるのか」「男気取りの王位強奪ではないか」「王子がご存命なのだから長子たるクラウド王子が王位を継ぐべきでは？」

それらの声がようやく落ち着いてきた頃合いで、クラウドが王女に向かい合う。

「アイラ、証拠はあるのか？」

「無い。少なくとも私は口頭で伝えただけだ」

そうか……とクラウドは肩を落とした。

沈黙が部屋を支配する。クラウドは目を閉じて何かを考え、アイラも彼の反応を待った。

本来であれば自分から攻めて相手を崩したいアイラだったが、今はそれも出来ない。

王の遺言に対し、証拠が無い。

それがアイラの最大の弱点だと、クラウドも理解しているのだ。

やはり悪くはない、とアイラは思う。

世間はアイラがクラウドを意に介していないと言ったり、あまつさえ見下していると評価している。

だが、アイラ自身はそうではないと思っていた。

無論、周りからそう取られてしまうだろうというのは理解していた。

だがそれでも、自分の為したい事と兄の成りたい王は違う場所を目指している。それだけがハッキリと違い、それ故にアイラは王を目指す道を走らねばならなかった。

だから、ここで負ける訳にはいかない。どうせ切れる手札が少ないのであれば、無闇にそれを減らさず、待つことも大事だ。

やがてクラウドは口に微かな笑みを浮かべた。

「父上は他に何か言っていなかったか？」

クラウドの表情に違和感を覚えるが、今は理由も思いつかなけれ

ば、相手の言を無視することは出来ない。

「『いずれ我々が、地上に戻るその日が来る。その時までラトリアの灯を絶やしてはならん。地上には友がいる、まだ見ぬ隣人がいる。ラトリアの国と民を大地に戻すまで、我々王族は』。そこまでだ」

一言一句過たずに繰り返す。その言葉から父の最期の思いを感じ取りたかった。

だが、それよりも先に、心のどこかが警鐘を鳴らす。

ガチャガチャと遠くから聞こえてくる音を捉えながら、クラウスを更に注意深く観察する。

「そうか……それは遺言としては十分すぎると思わないか。実に父上らしい立派な発言だ。誰もが納得するだろう」

尊大な態度をしつつも前線には出ないクラウスが、いつになく緊張しているのをアイラは感じ取る。

「そうだな、私もそう思うよ。王子」

だが彼女は理解できていなかった。

放蕩ぶりを誹られようと、彼とて時期国王として拘束される人生を歩んできたのだということ。

そしてそんな彼が妹に王位を退けられるということがどれだけ自尊心を傷つけ、自らの将来を揺らがすかという事実を。

クラウスの口端に、歪んだ笑みが広がる。

「我々以外の誰かが、私の口から聞いても、そう思うだろう。なあ王女」

「兄上っ！」

判らぬ者の強い言葉は、追い詰められた人間の最後の紐を容易く引き千切る。

戦場にあるかのようなアイラの強い叫び声に釣られるようにして、クラウスは部屋になだれ込んできた兵士達に叫んだ。

「衛兵、奴を捕らえろ！我が父の遺言に背いて王位篡奪を狙う反逆

者だ！」

バカな！と思うと同時になだれ込んできた兵士たちの装備を確認する。

（城勤めの近衛兵じゃない！）

近衛兵の兜には近衛軍の紋章が飾られている。師団毎に色が違うもののそれは彼らの誇りであり存在証明だ。戦場ならまだしも城内で軍団章をつけていない武具をまとう愚か者はいない。

アイラに判断がついたのは彼らが私兵であるだけで、取り巻きの者たちが集めた私兵である事は知る由もなかった。

アイラは彼らが”誰の”私兵であるかについて、考える必要がないと見切りをつけると即座に動いた。

「サルバ、眼を閉じてろ！」

「は？うわっ！？」

執政長官のひざ下に蹴りを入れて宙に浮かばせると、アイラはそのままサルバを抱きかかえて窓から飛び出した。

「馬鹿な！4階だぞ！？」

クラウスの声を背中に受けながら、アイラは無造作に飛び出す。そのまま地面に打ち付けられれば、さすがの彼女も骨を折って動けなくなる高さだ。

だがいくらアイラが蛮勇と誹られるほどの無茶をするとは言っても、自殺行為を好むわけではない。

彼女はただ窓から飛び出すのではなく、窓から約2メートル先にある城壁を目指して踏み切っていた。壁の意匠になっている台座に上手く足を乗せると、今度は下方にある木を目指して壁を蹴る。

上手いこと太い枝に足を乗せたアイラは止まる事無く滑り降りた。

すると木を降りるとサルバを整えられた茂みの裏に落とすように放り投げた。

腰をすさる執政長官はかなりの高齢だったが、そこはさすが国王の腹心だった。

彼は自分の身が動くことを確認すると長身のアイラを見上げて言った。

「逃げ出してどうするのです」

「逃げるしかないだろう……私には作りたい国がある。未来がある。相容れないのであればそれは兄ではなく敵だ」

言い捨てるアイラに迷いはない。向こうがこの日のために手はずを整えていたのと同じで、アイラも心の内では何度もこの未来を想像していたのだろう。

その割にはあのアイラが一手遅れを取っている事がサルバには信じられなかったが、アイラ自身も含めてアイラを支持するものは大衆ではなく見識高い一部の人間だった。

アイラもそれは弁えているのだろう。見据える先が何なのか、執政長官にも分からなかったが彼女の言葉からその欠片を拾う程度の事は出来る。

表情が険しいままのサルバを見て、王女は「つくづく心配性なんだな」と笑うと、悪巧みをしている子供のような顔で言った。

「単身で敵わないなら私も群れを味方につけるまでだ」

「……狼ですか」

強く頷いたアイラは近づいてくる馬の足音を捉え、用心深く茂みの中へ姿を隠す。

王女は剣をいつでも抜き払えるように構えていたが、角を曲がってやって来る馬と乗り手を確認すると馬の前に飛び出した。

「フィー！どうしたんだ！」

「クラウス様とフィーデル卿の御子息の私兵が動いています。お逃げになられると思っておりました」

フィオは女王に譲ろうと馬を降りる。

駆け寄ったアイラはサルバに聞こえないように小声で話しかける。

「しかし、どうしてここに？見ていたにしては早すぎるだろう」

「……昔からアイラは窓から逃げ出す事が多かったものですから。ノラ様に怒られていた時は、子供だというのに3階から飛び出しておりましたので、今なら4階くらい容易いだろうと判断致しました」

壁を使っても国王の執務室から抜け出せるルートがここしか無いと知っていた事は黙ってフィオは最低限の荷物をアイラに手渡した。

「ああ、あつたなあ……しかし今も同じだと思われるのは心外だぞ？」

やっておいてどの口が言うのですか、という言葉は飲み込んで代わりに溜息をつく。

ともあれ、フィオが馬を2頭連れてきたのはアイラにとっては僥倖という他なかった。

ようやく足に力が戻ってきたのか、サルバがもう一頭の鞍に足をかける。

それを確認して、王女も侍女に背中を向けた。

「……フィー、お前に頼みがある」

「何なりと」

「ミリアムに伝言だ。私はこれから狼の群れとじゃれてくる。それと、」

馬の首を掴んで跳ねたアイラは馬の鞍に収まって手綱を引き絞った。

「次に会う時は女王と呼べ、とな」

頭を下げたフィオを置いて、城門に馬主を向ける。

間を開けずについてきたサルバがフィオを気にしながらアイラの後を追いかける。

「大丈夫なのですか……？」

新人の侍女の気丈さを怪しむ気持ちが無いでもなかったが、この騒ぎに巻き込まれてしまう事を心配しての一言だった。

全くもって問題が無いどころかフィオ以外に託せる相手もいないのだが、アイラは細かいことは答えずに問題ないと切って捨てた。

「それよりここからが大事だぞ。気を抜くなよ」

2頭の馬蹄の音が、揉めるような男たちの声に近づいていく。腰の剣帯に下げた剣を片手で抜き払い、アイラが速度を上げる。

「……父様、見ていて下さい」

一日に2つも剣神に誓いを立てては、聞き入れてもらえないかな。思わず苦笑しながらも、眼前に現れた敵を見据えて心を入れ替える。

そして父の他にもう一人。彼の名前を口にしながら刃に口付けて、振り下ろす。

大国の中で、最も栄華を誇ってきたエスト王国で、王権を巡って国を二分した内乱の幕が切って落とされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2918x/>

君と往く戦記

2011年10月21日15時03分発行